中日新聞（夕刊） （第3種郵便物認可）

芸能

チェロの名手 戦争の犠牲に

名古屋が生んだチェロの名手が一九四五年の名古屋大空襲で、非業の死を遂げていたことが、弟子のチェロ奏者青木十良（九七）＝東京都世田谷区＝の本紙への証言で分かった。終戦から六十七年目の夏。楽器工場すら軍需転換させ、軍用機部品を製造させた太平洋戦争の断面が、埋もれていた音楽家の戦災死から浮かび上がった。

（長谷義隆）

名古屋大空襲で爆死 鈴木二三雄

弟子・青木十良が証言

この名手は、戦前の日本を代表するチェロ奏者の一人で作曲家の鈴木二三雄（一九〇〇～四五年）。国産初のバイオリンを製作した鈴木政吉を父に、八人きょうだいの五男として生まれた。

ドイツ留学から帰国した二三雄に東京で師事した青木は語る。「先生は名古屋で空襲に遭って亡くなりました。水上飛行機のフロートを作る工場の責任者をしていました。実家は鈴木バイオリン製造。戦時中で、楽器生産はすべて取りやめになり、軍需転換させられたんです」

鈴木鎮一記念館（長野県松本市）などによると、名古屋市東区にあった鈴木バイオリン製造の楽器製作は四四年、全面廃止。木工技術を転用し、水上機のフロートを製作した。

「悲惨な最期と聞いています。度重なる空襲で焼夷弾を消し止めるこつを覚えて、おれは上手だと言っていたようです。また、消そうと近寄ったら、焼夷弾がバーン。爆発でやられた。延焼を消し止めようとするのを防ぐ新型弾だったようです。むごいものです」

二三雄の最期について言及した記録はほとんどない。わずかに「自宅の防空壕で爆死」したとする松本善三著「日本のヴァイオリン音楽史」の記述があるだけ。青木証言はより具体的だ。

二三雄は名古屋市立商業学校（旧制）を卒業後数年間、実家の工場で弦楽器製造を手伝った後、東京音楽学校（現・東京芸術大）に進みドイツ人教師にチェロを学ぶ。卒業後、ドイツ留学しライプチヒで名匠ユリウス・クレンゲルに師事した。

長男、次男は家業を継いだが、鎮一、章、二三雄、喜久雄の四兄弟で鈴木弦楽四重奏団を三〇年に名古屋で結成、東京に進出した。同四重奏団は日本の室内楽演奏の草分けとして活躍、SP盤に名演奏を残した。

また、二三雄は名古屋発祥の「中央交響楽団」（現・東京フィルハーモニー交響楽団）の首席奏者も務めた。

作曲にもたけ、日本独自の創作音楽をめざし新興作曲家連盟に参加。朗読に与謝野晶子が参加した組曲「源氏物語」を残している。

三男の鎮一はドイツ留学時代からバイオリン奏者として名を挙げ、戦後は才能教育研究会を創設した。名古屋大空襲は何波にもわたって行われ、戦災死した日は定かではないが、四五年三月二十四日、B29百三十機が鈴木バイオリン製造の工場があった地区を含む市内各所を無差別爆撃をした。この日だけで死者千六百十七人が出た。

実家は楽器製造から軍需転換

1937年の鈴木弦楽四重奏団。左から鈴木鎮一、二三雄、章、喜久雄